

ローザ

二〇二四年八月二日六〇分版初稿 黒澤 世莉

Freiheit ist immer Freiheit des Andersdenkenden.

Rosa Luxemburg

自由とはいつでも、自分と意見を異にするものための自由である
ローザ・ルクセンブルク

●人物

- 一／クララ・ツェトキン 六六歳 ドイツ人
- 二／ゾフィー・リープクネヒト 四〇歳 ロシア人
- 三／ルイーゼ・カウツキー 五二歳 ドイツ人
- 四／フリードリヒ・エーベルト 五二歳 ドイツ人

●場所／時代

- 一九二四年三月五日
- フリーデリヒスフェルデの墓地
- ベルリン ドイツ＝ワイマール共和国

●本編

#一

そこはフリーデリヒスフェルデの墓地。
ゾフィーがローザの墓前に立っている。ルイーゼが現れる。

ゾフィー　ごめんなきい。ルイーゼ。私ばかりメソメソして。
ルイーゼ　いいんじゃない。泣きたいときは、泣けば。

ゾフィー　詩集、読む。リルケなんてどう。

ルイーゼ　いらない。先客がいるとは思わなかった。

ゾフィー　五年前が昨日のことみたい。一九一九年一月一五日、

あの声、あの人波、やまない銃声。革命軍も義勇軍もご苦労なこと、雪が降ってたんだからお家に帰ればよかったのに。

ベルリンの雪はかわいいものね。彼女、「こつちのひとは四季があるって言うけど、ソーネチカ、みつつの季節しかないわよね、春夏秋冬だわ」って笑ってた。私たちにしか分からない。ここにいるわ、彼女。

ルイーゼ　「私たち」って。ポーランド生まれでしょあの子は。

ゾフィー　ごめんなきい、同じ雪国だから。

ルイーゼ　ポーランドはロシアのものだと思ってるんでしょう。

ゾフィー　ひどい目にあって可哀想に。ローザ。

ルイーゼ　いいかげんメソメソしないでよ。

ゾフィー　泣いていいって言ったじゃない。

ルイーゼ　人の心は移りにけり、よ。

ゾフィー　そうやって見殺しにしたのね。

ルイーゼ　なに。

ゾフィー　その移り気な心とやらで、ローザ・ルクセンブルクも、私の夫も、カール・リープクネヒトも見殺しにしたのね。

ルイーゼ　ゾフィー・リープクネヒト。自分が何言ってるのか、分かってるの。

ゾフィー　ルイーゼ・カウツキー、カール・カウツキー夫妻が何してくれたっていうの。

ルイーゼ やめなさい。

ゾフィー 二人が追い詰められていたのに、見て見ぬふり。

ルイーゼ やめて。

ゾフィー 義勇軍には飼い犬みたいに尻尾を振って、

ルイーゼ やめてって言うてるでしょ、

＃二

クララが現れる。

クララ うるさい。うるさい。ここをどこだと思ってるの。

ゾフィー クララ。

クララ あははは。元気で何より、ゾフィー久しぶり。

ルイーゼも、会えて嬉しいわ。

ルイーゼ クララ・ツェトキン、ご無沙汰してます。

クララ ご主人はお元気。お子さんは。

ルイーゼ おかげさまで。

クララ 五年も経つと、こんなものかしら。寂しい気もする

し、居心地がいい気もする。でもやっぱり寂しいね。

ゾフィー 命日には、たくさんの方が集まりましたよ。

ルイーゼ 埋葬の日ほどじゃなかった。あの日はすごかったわ。

何十万人もローザのために集まって、行進して。

クララ そうそう、くたびれたわ。

ルイーゼ あなたなんにもしなかったじゃない。面倒なことは全

部、私とゾフィーでやりました。

クララ ご苦勞様、ありがとうございます。あはは。今日も世話になるよ。

ゾフィー うちにお泊りになるの。

クララ 労働者の味方、共産党の同志だろう、ゾフィー・リー

プクネヒト。まさかブルジョワの味方、社会民主党のカウツ
キー先生宅にお願いは出来ないよ。あはは。

ゾフィー　もちろん大歓迎ですけど。

ルイーゼ　政治屋さんときたら右から左まで、浮世のことには頓
着ないんだから。

ローザは違った。頭が切れただけじゃない。目立たないでも
必要なことに気を配ってくれたし、なにより礼儀正しかった
わ。それも虚礼じゃなくて、真心がこもってた、だからみんな
あの子のことが一発で好きになった。

クララ　そうかい。気むずかしい、壁のある、口ばつかり達者
なちびの女。おまけにびつこでユダヤ人。あんたたちはそう
言わなくちゃ。

ルイーゼ　皮肉ですか。

クララ　ローザ・ルクセンブルク。カール・リープクネヒト。
レオ・ヨギヘス。みんな私より先に死んでしまった。帝国は
倒した。あと一歩でドイツ革命は成功して、共産主義国家が
誕生したのに。覚えてるか、あの子が死ぬ前日に書いた記
事。

「私がかつていた。私は今もいる。私は今後もあるであろ
う」。

まるつきり遺言じゃないか。

あの日のお花の量といたら、あの子が見たらうつつとりして
こう言ったでしょうよ、「クラレチカご覧なさい、まるで天
国みたいね、色とりどりの花束がお祭りみたい」って、

#三

エーベルトが現れる。

ルイーゼ エーベルト閣下。

エーベルト おはよう。

クララ ドイツ共和国の大統領閣下が、革命家の墓参りとは。

エーベルト 公務でなければ問題あるまい。

クララ どうしてローザが死んだのかご存知無いようだ。

エーベルト ザクセン人は粗雑だな。

クララ いますぐここから消えて失せろ。

エーベルト 私がいると不都合なことでもあるのか。

クララ 不愉快なんだよ。

ルイーゼ クララ、エーベルト閣下、ローザの墓前です、自重して下さい。

ゾフィー 人殺し。よくものこのこと顔を出せたわね。

危険分子だとでっち上げて、何の罪もない主人と親友を汚いやり方で殺した。ベルリンを埋め尽くすような二人を殺せつてピラにも、当局はなんにもしてくれなかった。あなたが殺したようなものじゃない。

何とか言いなさいよ。

クララ 同じ左翼に同胞が殺されるとは、夢にも思ってたよ。

エーベルト 同じ左翼にこれほど足を引つ張られるとは、夢にも思わなかったよ。慣れたがね。

クララ 世界の社会主義者の代表、かのカール・マルクスのお膝元、ドイツ社会民主党も今は昔。ブルジョワの手先に成り下がって、革命を弾圧し、戦争に賛成し、まるで右翼の集まりね。

エーベルト 大統領になってから、左翼からは残虐な国粹主義者と呼ばれ、右翼からは血に飢えたアカと言われる。いったい私は左翼かね、右翼かね。

ルイーゼ　立派な社会主義者ですよ。大戦のあと、内乱とインフレでめちゃくちゃなこの国をまとめあげているんです。外国からは気違いじみた賠償金を要求され、国土を狙われて。心から尊敬しています。

クララ　ローザを殺すことはなかった。

ルイーゼ　ローザはやりすぎたのよ。

ゾフィー　謝ってください。ここにいたいのならせめて、自分が殺した人々に謝って。いまここで膝をついて。謝って。

問。

エーベルト　五年前、私はあなたの隠れ家を訪ねた、ゾフィー・リープクネヒト。覚えているか。なんのために伺ったのか。取り下げていただけるか。私が入殺しだという言いがかりを。

クララ　無視よ。無教育なエーベルトが大統領まで上り詰めたのは、調整力と弁舌に長けてたから。

ゾフィー　分かっています。

エーベルト　隠れ家に伺ったあと、あなたとローザは激しい口論をした。

あなたは夫、カール・リープクネヒトが社会民主党を離れることに反対だった。彼をそそのかしたローザを憎んでいた。

ゾフィー　ローザは私の親友です。

エーベルト　カール・リープクネヒトはローザ・ルクセンブルクの巻き添えを食って死んだ。

ゾフィー　そんなこと、思っていない。

エーベルト　彼女はあなたの友人だった。友人だったからこそ、自分の夫が自分よりローザの話を聞くことが許せなかった。

ローザの墓前に立つ資格があるのか、ゾフィー・リープクネヒト。

クララ 失せろと言ったよ二度言わせるな。

#四

エーベルト ルイーゼ、あなたがローザをやれ。

ルイーゼ は。

エーベルト あなたがローザを演じるんだ。

ルイーゼ ちよつと何言ってるか分からないです。

エーベルト そうだ。さかのぼってみようじゃないか。最後に彼女に会った日に。こちらのお嬢さんはローザに合わせる顔がないことを証明しよう。

ルイーゼ 無茶言わないで。

クララ あんた正気かい？

ゾフィー 私はローザの思い出と会いに来たのよ。

エーベルト ローザと会って、同じ口が利けるかな。

ゾフィー 喜んで抱きつくわ。

クララ 生真面目だからね、可哀想に。

ルイーゼ 激務がたたったんでしよう。

エーベルト 考えるな。感じる。

ゾフィー やるわよ！

ルイーゼ 無理です。

クララ 死んだ人間には会えないんだよ。

エーベルト はたしてそうかな。呼吸をするんだ。大きくゆつくり。身体を楽にして。想像しろ。想像しろ。ローザの顔、

ローザの声、ローザの身体。仕草、口癖、笑い声。涙、ささやき、怒鳴り声。想像しろ、死の瞬間を。

#五

そこはエデンホテル。

- 一 エデンホテルのロビーから玄関までひしめく群衆
- 二 殴れ殴れ殴れという声
- 三 廊下から階段までひしめく群衆の中を駆け足が行き交
う

- 四 ガガガ軍靴の音ドドド怒号怒号
- 一 彼女が現れる

- 二 「あいつを生かして帰しちゃいけない」

- 三 飛び乗ってまず一発、
- 四 頭蓋骨が鈍く響く、背筋から力が引いていく
もう一発、

- 二 赤い液体が透明な液体が飛び散る
- 三 最後の一発、

- 四 膝から崩れ落ちるところを脇から持ち上げられ
ボロキレだ

- 二 裏切り者に制裁を

- 三 俺達の祖国を後ろから刺した売国奴に鉄槌を
- 四 ボロキレを車に放り投げ

- 一 軍人の誇りを取り戻せ
- 二 軍人の誇りを取り戻せ

- 三 ボロキレを二人で挟んで乗り込み
- 四 車はエデンホテルの前を出発する

- 一四 祖国万歳、帝国万歳
- 二三 祖国万歳、帝国万歳

- 四 三。二。一。ローザ・ルクセンブルク、おはよう。

#七

そこはローザの隠れ家。

エーベルト 五年前、一九一九年一月一〇日。ベルリン。
クララ ローザが釈放されて二ヶ月後、死の五日前。

ローザがいる。ゾフィーがコーヒーを持って入ってくる。

ローザ三 おはよう、ソーネチカ。

ゾフィー おはよう、ローザ。よく眠れた？

ローザ三 牢屋よりずっといいわ。いい匂い。コーヒーを入れてくれたのね。

ゾフィー いまはこんなものしかないけれど。

ローザ三 外に出ないで買物なんて、神様だつて出来ないわ。

コーヒーが飲めるだけ上等、上等。(よろめく)

ノックの音がする。ローザ、いなくなる。

ゾフィー どちら様ですか？

エーベルト フリードリヒ・エーベルトだ。

間。

ゾフィー 生憎存じ上げません。どちらをお尋ねですか？

エーベルト 茶番はよそう、ゾフィー・リープクネヒト。時間がない。
い。

ゾフィー 人違いです。ゾフィーさんというかたはこの辺にはいませんね。私はアンナ・マチュケと申します。

エーベルト カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクを
救うためだ。ここを開けてくれ。時間がない。

間。ゾフィー、ドアを開ける。

ゾフィー 嘘をついたことをお詫びします。

エーベルト 構わん。

ゾフィー なぜここが分かったの。

エーベルト アジトは全て分かっている。いつ、どこにいるのか
も。

今日は私一人で来た。護衛はいない。

ゾフィー 信じられません。

エーベルト 表に出てみれば分かる。

ローザ・ルクセンブルクはどこだ。カール・リープクネヒト
は。レオ・ヨギヘスは。

ゾフィー まずは私がご用件をお伺いします。それから

エーベルト 自分の夫を助けたくはないのか。

ゾフィー ここにはおりません、本当です。

エーベルト あなたは一人で二杯のコーヒーを飲むのか。

ゾフィー くそつたれ。

ローザが現れる。

ローザ三 いいわ、ゾフィー。

ゾフィー、いなくなる。

エーベルト ローザ・ルクセンブルク、おはよう。

ローザ三 フリッツ、会えて嬉しいわ。

エーベルト 私もだ。

ローザ三 何年ぶりかしら。奥様はお元気。息子さんは。

エーベルト おかげさまで。

ローザ三 あら、雪が降っているのね。

エーベルト このバカげた革命をやめて社会民主党に戻って来い。

あなたの好きな散歩もできないベルリンをどうしてくれるんだ。監獄のほうがよほど安全だ。

ローザ三 あの素敵な牢屋より危険な国になっただなんて、政府はお昼寝でもしてるのかしら。

エーベルト 武力革命には反対していただろう。

ローザ三 私は魔法使いじゃない。民衆を革命に向かわせることも出来ないし、また革命に向かう民衆を帰らせることもできない。

エーベルト 武装蜂起をされたら、治安維持のために手を打たねばならん。

ローザ三 彼らは義勇軍の不当な暴力から身を守っているだけ

よ。情報の精度を確かめずに行動を選択するなんて、愚の骨頂ね。

エーベルト 十分な情報を集める時間がどこにある。

ローザ三 十分な検討を怠って下された結論ほど、自分を汚し貶めるものはないわ。

日和見主義のその場限りで舵をとっては、幽霊船のように難破するだけよ。

エーベルト 沈没するよりマシだ。あきらめろ。死ぬぞ。

ローザ三 革命を放棄した時点で、私は死んだも同然よ。

エーベルト だが死んではないない。生きていれば、やがてあなたの意志は労働者の力になる。

ローザ三 妥協した人間の主張はどんなに高尚で気高くあつてもその時点で軽佻浮薄に墮すわ。

エーベルト あなたの主義主張の価値が減じたとしても、あなたが消滅するよりはマシだ。

ローザ三 私の身体が減んでも、私の思想は滅びはしない。

エーベルト 労働者に権力を、か。いま必要なのは腹の足しにならない主義ではなく腹の膨れる腸詰だ。

いま目の前にいる労働者を救えず何の思想か、革命か。

ローザ三 世界革命こそが唯一労働者を解放する最善の手段よ。

クララ そうだそうだ。

ローザ三 現にロシアでは革命政府が樹立しているわ、レーニンに問題は多い、でも革命を断行したことは何物にも代えがたい勝利だわ。ドイツもあと一歩よ。

クララ 革命万歳。

ローザ三 労働者のための世界。すぐそこまでそれは近づいてきているわ。目を覆い、耳を塞いでも無駄よ。

エーベルト 死んで欲しくない。

オレは所詮仕立屋の息子で馬具職人だし、生まれついでの子ンテリとは頭の出来が違う。党学校で出会った時、あなたは最高の先生で、こっちは落第生だった。生まれてからいままでも、その差は開きつぱなし、年を取るほど開くばかりつてわけだ。オレに出来ることは職人よろしく、目の前に起きたことにいちいち反応して出来るだけマシになるようにウロウロするだけで。

ローザ三 一針一針、しつかりと皮を縫い合わせるように学ぶあなたの姿は美しかった。労働者が宰相になる素晴らしい前例があなただったのは、偶然でもなんでもない。

エーベルト 他になり手がなかっただけだ。本当はあんたみたいにな

頭のいいひとがやる仕事なんだよ。ところが、あんたは遠い理想にメラメラ燃えて明後日の方を睨みつけちゃいるが、足元で死にかけて赤ん坊のミルクや、目の前のダルマになつちまった兵隊をどう食わすかなんてことは、まるで眼中に無いんだから。

亡命しろ、カールと一緒に。手を貸してやる。

ローザ三　もし私が亡命したら、労働者はなんと思うでしょう。

安全なところから拡声器で声を張り上げる玉乗り道化師、大きな旗を空中で振り回しながら一輪車で遠ざかっていく曲芸師。ローザ・ルクセンブルクはそんな女だと思うでしょうね。それこそあなた方が望む事態でしょう。その手は食わないわ。革命万歳。

クララ　革命万歳。

ローザ三　ブルジョワ議会を解散して、労働者に権限を委譲せよ。

クララ　そうだそうだ。

エーベルト　残念だ。喧嘩相手が減る。

ローザ三　いつでもお相手するわ。

エーベルト　こういう時代だ。あなたが生きているならば、私は死んでいるだろう。

#八

ゾフィー　もうお帰りですか。

エーベルト　もう行かなくては。雪が積もる前に。

ゾフィー　あら、これくらい、ロシアに比べればどつて事ないわ、ねえローザ。

ローザ三　そうね。どちらにせよ、また会いましょう。

きつと会えるわ、私たち。

エーベルト 信じるよ。信じる。さようなら。

エーベルト、いなくなる。

ゾフィー ローザ、追いかけてみましょう。

せっかくエーベルト閣下が来てくださって、あなたのことをこんなに案じてくださって、わたし台所で聞いていて涙が出ちゃったわ、こんなに真心のある人ってこの国中探したってなかなか見つからないわよ。

クララ あはは。失礼。

ゾフィー 私の気持ちが分かっていただけたらね。

ローザ三 ソーネチカ、私の可愛い小鳥さん。あなたは政治のこととはなんにも分かってらっしゃらないのね。

ゾフィー すごく、すごく嫌な予感がするのよ。おとし兄が戦死した時もこんな予感したの、私のカン当たるのよ。

ローザ三 私は死にません、怖がらないで。

ゾフィー ちがうの、そうじゃないの。あなたは強い、あなたは立派、あなたは自分の運命に殉じて死ねるわ。カールもそう、自分が死んで世界が良くなるなら喜んで犠牲になる。でもね。

ローザ、もう十分なんじゃないかしら。もう十分やったんじゃないかしら。早かったのよ、ドイツに革命は。ロシアとは違って、まだ機が熟していないんだわ。どんなに立派な林檎の木だって、秋にならなきゃ実は結ばない。あなたがどんなに立派な革命家だとしても、民衆がついてこなければ革命は起こらないの。

あなたは燃える蠟燭でいいだろうけど、勝手に燃えればいいだろうけど、まわりまで飛び火しちゃう。今死んだってそれ

は無駄死によ。無駄死ににカールを巻き込まないで欲しいの。私のカールを奪わないで欲しいの。カールは革命家である前に、私の主人なんだから。

#九

ルイーゼ　ブタ。ブタよあんな。

政治家の妻でしょう、もつと誇り高くなさい。

エーベルト　ローザはそんな事言わないだろ。

ルイーゼ　ブーブーブー「私の彼」つて。

クララ　ローザよ、いま、ルイーゼ。

ルイーゼ　そのくせあんたみたいなのが、ローザの思い出を回顧録にしてひと儲けしてるんだから、怖いわね、女は怖いわ。

ゾフィー　みつともない。

ルイーゼ　はい。

ゾフィー　自分が旦那とうまくいつてないからつて、八つ当たりしないですよ。

エーベルト　ローザは独身だ。

ゾフィー　同じカールでもうちのお宅のはぜんぜん違うわね。

クララ　もう聞いてないね。

ゾフィー　うちのカールは一本気、お宅のカールは移り気。うちのカールは貧乏人の味方、お宅のカールはお金持ちの味方。

うちのカールは間違つたら素直に認めるおとな、お宅のカールは間違いを絶対に認めないこども。聞いてる人たちだつてね、カールカールつて、うちのだんなか、おたくのだんなか、髭のおっさんか、分かんなくなつてるわよ。

エーベルト　聞いてる人などいない。

ルイーゼ　生憎うちのは現実主義でね、おたくのブルジョワ出身のおぼっちゃまとは違つて童話を信じ切れなかったの。

ゾフィー　ブルジョワって何。ジョア？

クララ　え、このタイミングで？　結構出てきたよ？

ルイーゼ　金持ちのことだよ。

エーベルト　ちよつと違う。ジョアとはなんだ。

ゾフィー　一〇年前、一九一四年八月四日、ドイツ社会民主党の体たらくと言ったら。世界中がびっくりしたわよ。ドイツに戦争賛成の社会主義者がいるなんてね。皇帝とジョアにおもねって、平和主義の原則を根本からねじ曲げちゃうんだから。その犯人がそちらにおわせられるフリードリヒ・エーベルト閣下。にべもなく追隨したのがあなたのご主人、カール・カウツキー。戦争に負けて、賠償金をふんだくられて、領土をとられて、それがルイーゼの言う現実主義なの。あの日、ローザもうちのカールも、本当に本当にかっかりしてた。

クララ　私もだよ。

ゾフィー　怖いのは敵じゃないわね。ロシアでもフランスでもジョアでもない、同じ社会主義者だったんだわ。社会主義者が後ろから刺すっていうのは本当だったんだわ。

#一一

ローザ三　大好きなコブタさん。人を好きになる気持ちって、冬が春になるみたいに、私たちにはどうすることもできないの。あなたがカールを愛しているの、私よく知ってるわ。知っていますとも、ソーネチカ。それを身勝手だと笑うひとは笑わせておけばいいわ。

私の可愛いシマリスさん、あなたを悲しませるものは私が全部片付けてあげる。でも、わたしがあなたの邪魔ならば、あなたはあなたの力で、欲しい物を手に入れないといけない

わ。あなたには二本の脚がある、その脚で立てる。二本の腕がある、その腕で掴んだり放つたり出来る。そして頭がある、なにを掴みなにを放るのか、その頭で判断できる。

ゾフィー ローザ。あなたにとって私は、保護すべき雛鳥なの。馬鹿にしないで。私はゾフィー・リープクネヒト、誇り高い一人の人間、あなたと同じ一人の人間。同じ高さで私を見て。吐き気がする。

#一一一

そこはローザの墓前。

クララ ローザは驚だった。

エーベルト ルイーゼ、なかなか堂に入ったローザっぷりだった。

クララ せいぜいカラスね。てんでダメよ。

エーベルト いやいや、びつこの引き方なんか、瓜二つだ。

クララ ローザの肝心な部分が分かってないもの。

ゾフィー あのあとローザは出かけていったわ。まさかもう二度と会うことがないなんて、思わなかったから。

エーベルト 安心したか。

ゾフィー 観て分からないの。義勇軍とか言うゴロツキにぶん殴られて死んだ。可哀想なローザ。

エーベルト 次はもつと情熱的にやってみよう。それに論理的な知性が

ルイーゼ 次って何。

みんな帰って。もう、うんざり。ローザを悼む気持ちのある人間なんて誰もいないじゃない。

ゾフィー 私はあるわ。

ルイーゼ だまれ。

ゾフィー カールとローザを愛してた。

ルイーゼ リルケと浮気していたくせによく言うわ。

クララ ええ。

ゾフィー 出鱈目はやめて頂戴。

ルイーゼ 旦那が牢屋に入っている間によくやっていたって

ね。社会民主党の女性部では随分話題に上がってたわよ。

ゾフィー 私は愛してたわ。愛してるわ。そりゃ、すこし脇道に

それるようなことがあったかもしれない。でも、あなたたち

だってそうでしょう。

ルイーゼ 愛とか言えばなんでも解決すると思ってるところも気

に障る。

エーベルト ずいぶんと威勢がいいな、ルイーゼ・カウツキー。

クララ 大戦の前まではうまくやってたみたいだけど。

ルイーゼ 何も知らないくせに。

エーベルト 今度はあなたの番だ。あなたもゾフィー同様、ローザを裏切り、それを忘れ、自己陶醉のためにここに来た。

ルイーゼ 二人の関係をあんたたちに見せびらかす気にならない

い。

ゾフィー よく言うわ。

エーベルト ここここに及んでは、あなたの意志など問題ではない。

ゾフィー ルイーゼだってローザの本で儲けてるのに。

エーベルト ローザをこの場所に呼び出すんだ。分らんのか、い

まここに彼女がいるんだ、それは移ろう蜚気楼のようなもので、見るものがいなければ存在しないし、また見るものが見

たところできつ消えてしまいかわからない。

クララ 何を張り切ってるのよ。

エーベルト 必死でつなぎ止めないと、もう二度と現れない。

ルイーゼ　彼女は死んだ。
エーベルト　確かに彼女は死んだ。しかし、いま彼女は生きてい
る。

クララ　バカバカしい。

ゾフィー　あなたなにしに来たの。

エーベルト　観て分からののか。墓参りだ。これも墓参りの一環
だ。

ほら、耳を澄ませろ。猫の鳴き声が聞こえる。

ルイーゼ　ローザ、ミミが帰ってきたわ。

#一四

そこはルイーゼの家。

エーベルト　一〇年前。一九一四年八月六日。ベルリン。

ゾフィー　第一次世界大戦、開戦から二日後。

ローザ　気落ちしないで。明るく行きましょう。たしかに社会
民主党の議員連中には目も当てられないわ。でも、戦争に強
く反対する労働者たちのために、水先案内人をやらないと。

ルイーゼ　あなた、優しいわね。優しさつて、強さね。

ローザ　さあ笑つて、どうしてそんな顔をしてるのルルー。そ
れじゃ人を殺すときの顔よ。本当に戦争をやめさせたいな
ら、表情から変えなきゃ。

ルイーゼ　あなたを見ていると本当に、未来には希望があるん
だつて、思える。でもね、ローザ。私の目には、多くの労働
者は戦争に熱狂しているように見えるわ。

ローザ　私はそうは思わないけれど。

ルイーゼ　一五人の子どもを職人一人の稼ぎで養っている、惨め
なアブラムシは毎日を生きることには精一杯で、考える余裕な

んてない。

ローザー だから、私は戦うの。もうだまされることのないように、みなが物を学び、自分の頭で考えることが出来るように。自由な社会のために。

ルイーゼ 彼らは自由を求めてない、ましてや勉強なんて真っ平だつてツバはいてるわ。参政権だつて、どんなに必死になつて与えた所でドブに捨てるわ。

ローザー ルルー、私のヒナギクさん。あなたは私の最高のお友達。ドイツに来てからあなたと三人の子供たちのお陰で、どれだけ楽しい時間を過ごせたかわからないわ。覚えてる、初めてあなたと会ったとき、私マルクス主義の法王、カウツキー閣下のご夫人がエプロンをしてるなんて、つて卒倒しちゃつたわ。

私はカール・カウツキーとは徹底的に闘います。彼はつまるところ平和主義を装つて、戦争に賛成しているわ。あなた気づいているわね、頭の良い方ですもの。

ルイーゼ 彼は戦争に反対しているわ。なぜ彼が汲々としているのか、あなたには分からないでしょうね。

ローザー 分かるわ。

ルイーゼ いいえローザ、あなたには分からない。あなたはオデュッセウス、海を駆け抜ける英雄、自分の戦争で哀れなトロイの民がどんな目に遭うかなんてお構いなし。彼らは必至で抵抗してくるけど、あなたの叡智に逆らうつもりは毛頭ないの。ただ、その場で自分の家族を守るのに精一杯なのよ。あなたは孤独、孤独は強さ、だつて守るものなんか何もないから。

ローザー 世界の労働者を守るわ。

ルイーゼ 自分のことは捨てられるわ、自分が死ぬ分には勇気も

出せる。でも子供は無理、捨てられない、捨てられるわけがない。私が死んだら、あの子たちの面倒は誰が見るのよ。そりゃ誰か見てくれるでしょうよ、赤の他人がね。でも、赤の他人が私以上に愛情を注いで、育てることなんか出来るわけない。

ローザ一 目の前の物事にとらわれなくて本質を捉えましょう。

一〇〇年二〇〇年、子供の子供の子供の子供の、そのもつと未来まで見通すのが人間の想像力でしょう。

ルイーゼ 違うのローザ、そういうことじゃないのよ。

私たち人間には、生まれ持った枠組みというものがあるの。あなたのように選ばれたひとたちは、その枠組みから逃れられる、それが自由というものだわ。でも私は、枠組みから逃れたいと思いはすれど、実際に自由を手に入れたって持て余すばかり。

分かってローザ、信じてローザ、人間は変わらないって、変わらないことを許して。生まれついた階級から、抜け出さないことを望む人間を許して。世の常識に縛られて、変化から逃走する私を許して。束縛されたい私を、命令されたい私を許して。他人の不幸に共感できない不感症を笑って。

ローザ五 社会の仕組みが、エジプトの労働者を、インドの労働者を殺しているの。帝国主義と資本主義が結びついて、資本を求める猛獣となって蠢いているからよ。私たちは等しく緩慢に人殺しなの。でも、私たちの意識を変えられれば、この獣の牙を抜くことが出来るわ。私はオデュッセウスではないけれど。

ルイーゼ 戦場に子供を送っているのは私よ。

ローザ一 ルルー、目を開けて。

ルイーゼ あなたは歴史に名前を残すわね。頭がいいだけの人間

も、心が強いだけの人間もたくさんいるけど、その両方を
持った人間は早死にするか出家するかよ。人間は汚くて愚
か、矛盾と不純にまみれたドブネズミとして生まれついてい
るんだから。さつさと死んで名を残せばいいわ。

#一五

エーベルト クララ・ツェトキン、完璧だ。

クララ 褒めて伸ばすタイプなんだね。

ゾフィー 私は死ねなんて言わなかった。

ルイーゼ 陰湿な女。

エーベルト ローザの死を悼む資格があるとは思えんな。

ルイーゼ ブタ。ユダヤ人。

エーベルト 誰に向かって物を言っている。

ルイーゼ ドイツ共和国大統領エーベルト閣下に。義勇軍で革命
をつぶし、労働者を失業と飢えに苦しませ、外国に舐められ
てる、偉大な指導者様に。

エーベルト 撤回しろ。私はユダヤ人ではない。

ゾフィー 人種差別はやめて。

ルイーゼ うるせー劣等民族。貞淑な妻を装って腹の底ではセツ
クスと金儲けのことしか考えてないクズが。卑屈に見せかけ
て甘やかしてもらおうなんて奴はブタよ。分かったらさつさ
とロシアに帰れ。

ゾフィー ローザもユダヤ人よ。

ルイーゼ ローザはいいんだよ。

クララ いつのまに民族主義者に転向したんだか。

ルイーゼ あなたやローザに影響されて、進歩的女性を気取った
こともあったけど。人間、生まれ持った性質は変えられな
いし、違う階級、国家、人種、性別と共感なんかできっこな

い。わたしはあんたにも、あんたにも、あんたの過去にも共
感しない。

ウンザリ。政治の話も何もかも、ウンザリ。

ゾフィー 分かるわー。

ルイーゼ 浮気者の泥棒猫は黙つとけ。

ゾフィー はい？

エーベルト 確かに共産党にはウンザリさせられる。

クララ 元々の原則を踏みにじっているのはあんたたちでしょ
う。

ルイーゼは結局カール・カウツキーに従つてただけじゃない。
い。自立しなさい。いつまでも男に従うことないわ。あなたが
カール・カウツキーから離れることを、ローザも望んでい
たのよ。

ルイーゼ ドイツでは革命は起こせない。右を見ても左を見て
も、右も左も自分たちが何をしているのか分かつちやいない
んだ。このままゆるやかに滅びていくのよ。

先行きは暗いわ、ローザ。

#一六

ローザ二 可愛いアカシアさん、わたしは大いにお説教をします
よ。まず、田舎に行きなさい。都会にいてはダメ。温泉があ
るところがいいわ、温かいお湯は身体も気持ちも、凝り固
まったものをほどいて、自然な状態に戻してくれるわ。
次に、カールのこと、許してあげてちょうだいね。私も随分
キツくいましたけど、やっぱり彼の目の回るようなネクタ
イを思うとたまらなくなります。論文がいつも焼き直しばか
りで、言動には致命的な欺瞞がある、でも彼はまじめでし
た。そしてあなたを愛していますよ。

最後に。あなたは、何があつても、私の一番のお友達。私があなたを思つてなにかするようには、あなたはいつも私のことを一番に思つてくれるんだわ。これは間違いのないことですよ。

あなたをたくさん抱きしめます。

ルイーゼ ユダヤ人が、私を許すつていうの。ブタ。

#一七

そこは墓前。

エーベルト 弱いから、泣くのかね。女というやつは。

クララ 撤回しなさい。あんたも泣きながら生まれてきたのよ。

ルイーゼ クララ、あなたのローザ、言うほど大したことなかった。

クララ 忠実に再現したわよ。

ルイーゼ 戦争が始まったときの憔悴っぷりはあんなもんじゃなかった。

クララ 私のほうが喚いてたよ。

ゾフィー 私は。

クララ どうしてローザを見捨てたの。あの子はある必要としてたのよ。

ルイーゼ 思想を共有してたあなたには、決して分からないわ。

ゾフィー ねえ、私は。

クララ 帰る。これ以上あんたたちと馴れ合いたくない。

エーベルト 融通がきかない共産黨員は。

ルイーゼ もう一回会わせて。もう一回会ったら、違う結末に出会えそうな気がする。

クララ ローザが哀れだよ。

ゾフィー 私はもつと人間臭いのが観たい。政治の話あきちやつた。

ルイーゼ 思い出すのは政治の話ばかり。私の身体は滅んでも、私の思想は滅びはしない。

クララ 共産主義は滅びはしない。

エーベルト こういう勘違いをしている手合いが多い。

クララ ローザの遺志を継いでいるのは私たちよ。

エーベルト ソヴィエトの手下がよく言うな。

クララ では、あなたは。軍人と妥協して、右翼と妥協して、外国と妥協して、それでドイツはどうなったのよ。みんなが幸せになったの。飢えた人は減っているの。どんどん増えているじゃない。

ロシアがあつた。革命を成してロシアに頼れば今ほどひどくはならなかった。ローザと目指した、労働者による労働者のための、搾取のない世界よ。

エーベルト レーニンのソヴィエトにどれほどの力があつたというのか。鎌と槌をかじって生きろというのか。

クララ ドイツでうまくやれば世界同時革命の波が広がった。そうすれば食料の心配もなかった。

ルイーゼ フランス人やイギリス人が、ドイツ人とロシア人の後追いをするなんてありえない。

エーベルト あなたたちの革命には希望が詰まっている。だがそれだけだ。政権をとったあとの用意は何もない。ソヴィエトの言いなりになって銃を持ち、無闇矢鱈と騒ぎ立てるのがローザの目指した社会なのか。世界同時革命。夢物語だ。

クララ 夢物語ではない、哲学よ。哲学がないところに人間は生きられない。

エーベルト 哲学でじゃがいもが増えるならいくらでも学ぶ。

クララ 花を楽しむ心、手料理を味わう心、だれかを大切に思う心。無駄に思える時間にこそ、人間性の豊かさは現れる。豊かな人間で構成された社会でなければ、生産的な行為、創造的な行為の効率は上がらない。

エーベルト いびつな理想主義だ。まったく科学的ではない。その行き着く先は、せいぜいが労働者による素朴な衆愚政治だ。あいつらはローザ・ルクセンブルクでもなければクララ・ツェトキンでもない。怠ける、羨む、蹴落とす、欲に目がくらむ、理想郷など不可能だ。あれほどの知性を誇った女が、なぜ革命なぞという下らんものを信じたのか。全く理解できない。

ゾフィー あなたがやったらいいんじゃない、ローザを。

エーベルト え。

ゾフィー そうすれば、ローザの気持ち分かるんじゃない。

クララ バカバカしい。

ルイーゼ 一七年前とかいいんじゃない、ロシア革命。

ルイーゼ ずいぶん興奮して帰ってきてたし。

ゾフィー その頃よく知らないけど。

ルイーゼ 私は仲が良かったわ、あの頃が一番。クラナツハ街の彼女の家に毎日遊びに行った。

ルイーゼ 怖気づいたの、エーベルト閣下。

#一八

クララ 記憶に残っている景色はいつも最高。忘れてしまうんだ、嫌なことは全部。そうでないと人間は生きていけない。

エーベルト、いいわ。もう二度と思い出したくないことを、思い出そう。

#一九

そこはクララの家。

ルイーゼ 一七年前。一九〇七年八月二一日。シュツットガル

ト。第二インターナショナル第七回大会、最終日。

クララ 私になにか言うことがあるんじゃない。

ローザ二 すぐカツとなるのは悪い癖よ。

クララ あんたに言われたくないわ。

ローザ四 ロシアで見聞きしたことはこれで全部よ。ペテルブル

グはすっかり落ち着いちゃった。

ローザ二 機が熟しきっていなかったのよ、未熟な林檎は渋かつた。

ローザ四 でも、私が見たところでは、いまでは革命のつぼみはそこかしこに見られるわ。五年か一〇年かもつと先か、一斉に芽吹くでしょう。

ローザ二 当面の私たちの仕事としては、ドイツの惨状をなんとかすることね。

ローザ四 本当にこの温度差と言ったら、どちらがマルクスの生まれた国か分からないわ。

ローザ二 ロシアの同志に呆れられないよう、せつせと励みましようね。

クララ コースチャのことよ。私が聞きたいのは。

コースチャのこと。

私の息子。

あなたとコースチャのこと。

まさか隠し通せると思っていたわけじゃないわよね。私が聞きたいのは、あなたとコースチャのこと。

コンスタンチン・ツェトキンとローザ・ルクセンブルクの関
係。

ねえローザ。あなたの口から聞きたいの。

ルイーゼ　　もういいの。

ゾフィー　　知ってた。

クララ　　ローザ。

ルイーゼ　　まさか。

ゾフィー　　見てるほうが面白そう。

クララ　　ローザ。

それじゃ分からない。ローザ、それじゃ分からないわ。

もう二度と会わないでちょうだい。

手紙もやめて。

うちの子をもてあそばないで。

ローザ四　　違う。あなたに分かっていただけたらね。

クララ　　ねえ落ち着いて考えて、あの嫉妬深い陰謀家、レオ・

ヨギヘスが知ったらどんなことになるか。ローザ。

ローザ四　　別れたの。

クララ　　今なんて言ったの。

ローザ四　　一人ぼっちなの。

クララ　　そう。

ローザ四　　コースチャを取らないで。

クララ　　コースチャはあなたより二〇歳も年下よ。

ルイーゼ、ゾフィー　　二〇歳。

クララ　　うまく行きっこないでしょう。なぜレオと別れてし

まったの、あんなに信頼しあっていたじゃない。それはいつなの。いつの話なの。だって、二人の家に住んでいるじゃない。そんな急に。ドイツに帰ってから。そのもつと前から。

何とか言いなさい。

そんな態度でいる限り。絶対に認めないからね。

ローザ四　レオ。に。いいひとができて。

クララ　いつ。

どこで。

ワルシャワ。あなたが刑務所にいる間。

フィンランドにいたとき。その前。

浮気。え、浮気でしょ。

言っちゃ悪いけどローザ、それ単なる浮気でしょ。

いやいや、ローザ、正気になりなさい。

許しておあげなさい。

ルイーゼ　女性解放運動家が。

クララ　男はしょうがないわ。

ゾフィー　バレたら失業ね。

ローザ四　無理無理無理無理。無理よ絶対。

クララ　コースチャとどうするの。どうなるの。未来なんかないわよ。コースチャでもいいなんて、あなた、それは軽率すぎるわ。ただそこにいた若く聡明で綺麗な男に手を出すなんて、そんなの進歩的でも何でもない。淫売じゃない。

ローザ四　母親だからつていじくりまわさないで。コースチャの母親だから私を侮辱していいの。秘密にしたのは謝るわ。だけど真剣よ。私もコースチャも真剣なの。

クララ　なら、結婚なさい。

ローザ四 嫌。

クララ この。

ローザ四 あんなものくだらない、国家が管理するのに都合がいだけの決まりごとじゃない。私達の関係は法律で規定されるようなものではないわ。

クララ 歴史上ずっと結婚制度が続いているのは、それが必要だったからではなく効率的だったからよ。

ローザ四 せいぜい二千年の期間で見ればね。あなたに分かつていただけたらね。農耕が始まり資本の偏りが生まれる前まで、共同体内での人間関係はもつと広くなだらかなものだったわ。

クララ あなたは原始人じゃないでしょう。

ローザ四 過去から学ぶべきところは多い。

クララ それは社会全員が進歩的にならない限り無理よ。

ローザ四 それが革命でしょう。

クララ ねえ、本当に、正直な話をきかせて、ローザ。

あなた、本当はどうしたいの。あなたの正直な言葉が聞きたいの。

レオと一緒にになりたいの。コースチャと一緒にになりたいの。聞かせて、お願い。

ローザ四 レオ。

クララ コースチャと別れてもらうわ。

ローザ四 正直に話せばって言ったじゃない。

クララ あの子はいい子よ。残念だけど、ローザ。

ローザ四 クラレチカひどい。クラレチカひどい。侮辱だわ、ひどい侮辱だわ。謝って、謝って頂戴。

クララ 嫌よ。

ローザ四 二度と私の前でレオの話をしなないで。

ローザ四 コースチャ、私のコースチャ、捨てないで、私を捨てないで。

クララ ローザ。

ローザ四 コースチャ、今日は何時に帰るの。次はいつ来られるの。

クララ さあ、もうこの話はおしまい

ローザ四 あなたに勧められてシラーを読んだ。ロマン・ロランの新作を貸してあげる。

ローザ四 とっておきのグラージュを作りました。

クララ 飲み込みづらいかもしれないけど

ローザ四 ミミもあなたに会いたがつてる。抱きしめて、もつと強く。私のどこが好き。

クララ わたしはクララよ。

ローザ四 あなたの目が好き。

クララ ローザ、しっかりして。

ローザ四 背中。くちびる。手。胸。指。話。私のこと馬鹿だと思ってるでしょ。

クララ 離して。

ローザ四 でも私の事好きでしょ。

クララ いや、やめて。

ローザ四 馬鹿なところも可愛いつて言つて。

クララ 出ていって、ローザ。

#二〇

そこは墓前。

ゾフィー コースチャとは、その後どうなったの。

クララ 戦争で死んでしまうまで続いたみたいだけどね。よく分

からない。分かりたくもない。

ルイーゼ　ありがとう、クララ。

クララ　なんだなんだ、気持ち悪い。

ルイーゼ　こういうローザ、知らなかったから。

ゾフィー　ローザも私とおんなじね。

ルイーゼ　ハッ。よく普通に付き合えたわね。このあと。

クララ　触れなければいいだけの話だから。簡単ではなかったけれど。

ゾフィー　あなたはそれでよかったの。

クララ　いいも何もないさ。理論はあの子に頼り切ってるんだ。

　　だ。ローザに借りがあるのよ。

ルイーゼ　あなたが革命を続けるのは、ローザのためなの。クララ。

クララ　まさか、私はそんな、ローザのためなんておこがましい。そう、でも、生き残ってしまったからね。

ゾフィー　彼女のこと、何か分かった、エーベルト。

エーベルト　幻滅した。クララ、あなたもただの女だな。

クララ　撤回しなさい。

エーベルト　ローザがただのヒステリー女とは。

問。

クララ　あんたにはそう見えたの。

エーベルト　信じられん。

ゾフィー　気持ちはわかるわ。いつでも誰でも、幻想を抱くものよ。

ルイーゼ　それが裏切られたとき、頭では分かっているけど身体はついてこないのよね。

エーベルト 私を知ったふうに語るな。

ゾフィー あら。

ルイーゼ いままでさんざんご自分でなさっておいて。

クララ もっとさかのぼってみようか。あんたがはじめて彼女

と親しく話した頃。ドイツ革命より、世界大戦より、ロシア

革命よりも前。

ルイーゼ こんどはあなたの番よ、エーベルト。

ゾフィー これも墓参りの一環よ。思い出すといいわ。

ルイーゼ 呼吸をするの。大きくゆつくり。身体を楽にして。想

像して。想像して。ローザの顔、ローザの声、ローザの身

体。仕草、口癖、笑い声。涙、ささやき、怒鳴り声。

クララ 想像して。三。二。一。

一二三 フリッツ。おはよう。

#二一

そこは学校の廊下。

クララ 一八年前。一九〇六年一〇月一五日。社会民主党党学

校、ベルリン。

エーベルト 質問があります、ローザ。

ローザ一二三 なんなりと。

エーベルト 刑務所から党のカネで保釈されたのに、執行部に文句

を言っているそうですね。

ローザ二 授業の話じゃないの。

エーベルト 駄目ですか。

ローザ三 構わないわ、社会民主党事務局長どの。

エーベルト 私は、あなたの党への功績を鑑みれば妥当だと思いま

す。何が不満なんですか。

ローザ一 私は誰の世話にもなりたくないわ。世の中の誰とも対等にお付き合いしたいの。党に買ってもらった自由なんてつまり、党に束縛されるのと同じことよ。

エーベルト 死ぬかもしれなかったんです。

ローザ二 革命のために死ぬのなら本望だったわ。

エーベルト ローザ、それは困ります、私が学べない。

ローザ三 そうね。あなたを教育するために、私は生き延びたのかもね。

エーベルト 正直に言つて、あなたの主義にはついていきません、過激すぎます。ですが教育者としてのあなたは、本当に優れています。ですから、あなたが先頭に立って民衆を煽るのは、やめてほしいのです。長生きして、もつと教育に力を注いでください。マルクスは二〇年前に死にました。フランス革命は一〇〇年前です。時代が違います。

ローザ一 十分な検討を怠つて下された結論ほど、自分を汚し貶めるものはないわ。

ローザ二 あなたが帝国議会に立候補しても、応援演説はお断りしないかね。

エーベルト 党内の派閥を越えて飛び回っているじゃないですか。

ローザ三 でもあなたは例外ね。

エーベルト ひどいや。

ローザ一 私たちは革命を起こす。一番単純で明確だわ。

ローザ二 労働者全員が政治に参加できて、好きなようにモノを言う自由があつて、お互いいたわり合い慈しみ合う。

ローザ三 私たち、考え方が真逆じゃない？

エーベルト そうですね。

ローザ一 でも、うまくやれてるじゃない？

エーベルト ええ、まあ。

ローザ二　それが世界中に広がるの。どう、ウキウキするじゃない。ウキウキすることつて、とても大切なことよ。

エーベルト　ローザ。あなたにとって革命とはなんですか。

一二三　　しあわせ。

ローザ三　世界中のひとびとが、一人残らず自由に生きるのよ。

ローザ一　考えただけでワクワクする想像じゃなくつて。

エーベルト　ワクワクしているとを申し訳ありませんが、そんな未来は来ませんよ。世界中の人々には、つまり。自分で考えて決断するような、その、頭がない。

ローザ二　人間を見くびりすぎよ、フリッツ。ブタ扱いしないでほしいわ。

ローザ三　どんなに愚かなことをしでかしても、いつかはそれをバカだったと気付くわ。

ローザ一　信じられなくてどうするのよ。労働者をブタ扱いする政治はブルジョワだけでたくさんよ。あなただって本当は、

ローザ一二三　　信じたいんでしょう。

エーベルト　いや。それは。どうも。

ローザ二　フリッツ。目をつぶってご覧なさい。想像して。

エーベルト　はい。

ローザ三　何が見える。

#二三

そこはオリンピックスタジアム。

一　　オリンピックスタジアムにひしめく群衆

二　　まだかまだかまだかという声

三　　座席から階段までひしめく群衆の中を興奮が行き交う

四　　ガガガラジオの音ゴゴゴ号砲号砲

- 一 彼が現れる
- 二 「民族の祭典の開幕」
- 三 起立してまず拍手、
- 四 スタジアム中に響く、下腹から力が湧いてくる
- 一 大歓声、
- 二 黄色い声援が鷹揚な声援が飛び交う
- 三 最後に一喝、
- 四 地面が割れんばかりの歓声を受け止め
- 一 英雄だ
- 二 愛国者に花束を
- 三 俺達の祖国を力強く取り戻した感謝を
- 四 英雄を車に見送って
- 一 民族の誇りをこの胸に
- 二 民族の誇りをこの胸に
- 三 英雄は気高く挙手して起立し
- 四 車はスタジアムの中を巡回する
- 一三 総統万歳、帝国万歳
- 二四 総統万歳、帝国万歳

そこはベルリンの街角。

- 一 東西に伸びる壁にひしめく群衆
- 二 いまかいまかという声声
- 三 西から東までひしめく群衆の頬に感涙が流れる
- 四 ビビビテレビの音ビビビビデオビデオ
- 一 壁が崩れていく
- 二 「念願の瞬間」
- 三 抱き合っつてまずキス

- 世界中に響く、街から歌が起こる
四
一 大合唱、
二 年老いた歌声いとちいさき歌声が唱和する
三 最後の一発、
四 壁が崩れ落ち歓声はやまない
一 統一だ
二 国境線の隣人に握手を
三 俺達の祖国に永遠の平和を
四 名も無き人たちの抱擁は世界へと
一 壁は崩れ新しい世紀が始まる
二 壁は崩れ新しい世紀が始まる
三 名も無き人たちは衛星に駆け上り
四 映像は世界を駆け巡る
一三 統一万歳、統一万歳
二四 統一万歳、統一万歳

そこはエデンホテル。

- 一 エデンホテルのロビーから玄関までひしめく群衆
二 殴れ殴れ殴れという声
三 廊下から階段までひしめく群衆の中を駆け足が行き交
う
四 ガガ軍靴の音ドドド怒号怒号
一 彼女が現れる
二 「あいつを生かして帰しちゃいけない」
三 飛び乗ってまず一発、
四 頭蓋骨が鈍く響く、背筋から力が引いていく
一 もう一発、

- 二 赤い液体が透明な液体が飛び散る
- 三 最後に一発、
- 四 膝から崩れ落ちるところを脇から持ち上げられ
- 一 ボロキレだ
- 二 裏切り者に制裁を
- 三 俺達の祖国を後ろから刺した売国奴に鉄槌を
- 四 ボロキレを車に放り投げ
- 一 軍人の誇りを取り戻せ
- 二 軍人の誇りを取り戻せ
- 三 ボロキレを二人で挟んで乗り込み
- 四 車はエデンホテルの前を出発する
- 一四 祖国万歳、帝国万歳
- 二三 祖国万歳、帝国万歳

#二四

そこはローザの家。

- エーベルト ちょうど一九年前。一九〇五年三月五日。ベルリン。
- クララ 遅いよ何やってんの。
- ルイーゼ クララがクジラを買ってこいとか言うからですよ。
- ゾフィー クジラじゃなくてペンギン。
- クララ だって、ローザは動物が好きだから。
- ゾフィー どこまで行つたの。
- エーベルト フィンランドです。
- ゾフィー えード田舎。
- ルイーゼ え、手ぶら？
- エーベルト 一〇マルクでペンギンが買えますか。
- クララ うん、まあ、本気にすると思つてなかつたから。

エーベルト 冗談、だったんですか。この二〇時間。

ゾフィー そういう、エーベルトさんの生真面目なところ、いいと思うなあ。

クララ レオとエーベルトは便利ね。

ゾフィー 優秀。

ルイーゼ 優秀。

エーベルト それでロシアのストライキの話ですが

ルイーゼ あんた仕事しに来たの？

エーベルト え？

ルイーゼ 今日がなんの日か分かってんの？浮世離れしてる自分
カッコイイとか思ってるんじゃないの？

クララ ほらぼーつとしてないで、花持ってきて。

エーベルト あの、外にあるやつですか。

クララ そうよ。今度はイタリアまでおつかいしたい？

ゾフィー 何をどう飾るの。

エーベルト ちょっと、量が多すぎて運びきれません。

ルイーゼ ガタガタ抜かすな持ってこいよ全部。

エーベルト はい。

ルイーゼ あの新人り使えないわ。

ゾフィー 面白いじゃないですか。ひひ。

クララ そう言わないで、長い目で見てあげないと。

ルイーゼ クララはのんきでいいわよねー、私無理、賢くて鋭い
人じゃないと。

クララ 私は買ってるんだけどね。

ゾフィー ルイーゼさんの旦那さん、まさにそんな感じですよ
ね。

ルイーゼ そうね。

ゾフィー 憧れちゃうなー私もいい出会いがないかなー。

ルイーゼ　こんどうちに来なよ、紹介するから。

ゾフィー　やった。ビールはこれでいいですか。

クララ　足りない足りない全然足りない、倍は持ってきて。

ゾフィー　ルイーゼさん、手伝ってもらっていいですか。

ルイーゼ　嫌。嘘だよーん。

クララ　ローザ、早く。あなたのお祝いだよ。

ルイーゼ　アカシア

ゾフィー　ロビーニア

エーベルト　スマレ

クララ　まるで天国みたい、色とりどりの花束がつて、こうい

うのはお祭りみたいって言うのよ。

ルイーゼ　ハイビスカス

ゾフィー　カタルパ

エーベルト　ラベンダー

クララ　乾杯しよう。あんたと、あなたの革命と、人間の想像

力と、世界と、未来と、ビールと、とにかくすべてのもの

に。

ルイーゼ　ラン

ゾフィー　アイリス

エーベルト　ヒヤシンス

クララ　愛してるよ。お誕生日おめでとう。

エーベルト　おめでとう。ローザ。

#二五

ローザ一　熱狂、熱狂、熱狂、ビール、喝采、冗談、喝采、ビ

ール、正論、反論、ビール、怒号、反論、ビール、怒号、冗

談、ビール、ビール、ビール、喝采、喝采、喝采。

ローザ二　流れる汗を拭くより前に、囲まれる人人人垣に握手抱

擁抱擁握手、労働者団結せよ、世界同時革命、インターナショナル大合唱。ホールにはキラキラキラキラ輝く瞳。街角にはキラキラキラキラ瞬く夜空。

ローザ三 火照った頬を夜風に冷まさせながら、身体的高揚感のあとに胸の奥からせり上がってくる精神的無力感を、ため息と共に吐き出す。

ローザ四 呼吸は私を生き返らせる、何度でも何度でも生まれ変わる。

ローザ一 追いかけてくる足音、振り向かず運ぶ脚、夏ならカエルの大合唱と、冬なら雪の音が囁く夜道。軒先で手を振って、あなたは歩いて行く。

ローザ二 明かりをつけて、清潔な部屋着に着替えて、机に向かって、私の私である時間へようこそ。

ローザ三 気まぐれなミミは足元で遊んだり眠ったり。

ローザ四 本のページを繰る繰る繰る繰る、

ローザ一 新しいもの古いもの、知っているもの知らないもの、好きなもの嫌いなもの、全部まとめて繰る繰る繰る繰る。

ローザ二 この時、私は世界、世界は私。

ローザ三 すべてが信じられて、ひとつになる瞬間。

ローザ一 私は信じる。信じる。信じる。

ローザ二 感じる、感じる、感じる、

ローザ三 明日が近づいてきている。

ローザ二三四 未来はあなたの手の中に収まる。

ローザ一 夢、夢、夢とひとつづきの、

ローザ二 現実。

ローザ三 明かりを消して、糊のきいたシーツに挟まれて、

ローザ一 感謝感謝感謝、

ローザ二 気持ちのいいベッドを準備してくれてありがとう。

ローザ三 あたたかい。
エーベルト おやすみ。

おわり

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール info@level19.net

発行元 黒澤世莉 二〇二四年八月二日